五

陽が落ちてどのくらい経つのだろう。朧月を駆りながら、ふと聞起は思った。もう朔州に入っていた。宋家村から朔州までおよそ三百里。百里毎に休ませたが、そろそろ限界だった。朧月の息が荒くなっている。

黄玉の家が見えた。いかにも黄玉らしい、簡素だが頑丈そうな家だ。窓から灯りが漏れている。塀くらい立てればいいのに。聞起はそう呟いた。

着くなり、戸を叩いた。

「黄玉、開けろ。聞起だ」

戸の向こうで、黄玉の声がした。

「どうした聞起。こんな遅くに」

いきなり戸が開いて、聞起は家の中につんのめりそうになった。

「大変だ。雪華姉ちゃんが罠に嵌って、太原府に行ってしまった。おまえはすぐに太原府に向かって、姉ちゃんを助けに行くんだ」

黄玉の面(おもて)に、蒼い炎が燃え上がった。

何て綺麗なんだ。切迫した状況を忘れさせるほどの、凄絶な美しさだった。何度も見ているはずなのに、聞起はいまだに慣れなかった。幼い頃から整った顔立ちの娘だった。だが、母親を賊に殺され、雪華について武芸をはじめてから、その美しさに何か異様な神々しさが加わった。雪華姉ちゃんも美しい。けれど黄玉のこの美しさは、ほとんど人を超えている。

「聞起、詳しく話せ」

黄玉の抑えた声が、闇の中に溶けていった。

聞起はおおよそのことを告げた。黄玉は身じろぎもせず、聞起の話を聞いていた。

「それは間違いなく罠だ。聞起、わたしはすぐに太原府に向かう。無用様は今頃、太原府に着いている頃だな。いかに無用様が強くても、

騎馬の助けが絶対に必要だ。騎馬で戦えるのは、聞起、おまえとわたしだけだ」

「俺は、朧月を休ませたら阿骨打将軍のところに向かう。おまえ一人で先に行ってくれ。おまえの蒼月(そうげつ)なら一日で行けるはずだ」

黄玉は少しの間、聞起の目を覗き込んだ。

「そんなに時はかけない。聞起ほどではないが、わたしも馬には自信がある。蒼月も戦にこそ本領を発揮するが、普通の馬より遥かによく走る。雪華姉様は無事なのだな」

「分からない。だけど無用の小父さんは、そう簡単には殺さないだろうって言ってた。俺もそう思う。いや、思いたい」

「雪華姉様の命が失われたら、わたしも果てよう。生きる意味がない」

本当にそうするだろうと、聞起は思った。もちろん、聞起にしても、他の仲間にしても、雪華のために命を投げ出すなど何ほどのことでもない。だが、黄玉の一途さはそれを超えたものだ。

「すぐに向かう。太原府に着けば、消息が分かるだろう」

「ああ、無用の小父さんが大人しくしてるわけがないからな」

「曹瑛は」

「分からない。もしかすると……」

聞起は目を伏せた。

「そうか……」

そうつぶやいて、黄玉は厩に灯を点した。蒼月のいななきが聞こえる。

聞起が西夏から連れて来た五頭の汗血馬(かんけつば)※のうち蒼月が最も大きく力も強かった。五頭は雪華に名づけられ、それぞれにふさわしい主(あるじ)のもとに振り分けられたのだった。聞起の朧月は最も速く、そして長く駆けられる。雪華の残月は、まさしく五頭の長という感じだ。頭もよく、体力もあり、何より果敢だった。黄玉の蒼月も怯まない馬だ。戦馬らしく、武器や火薬にも慣らされている。馬上での戦いのために、黄玉はかなりの調教をしているようだった。

※汗血馬　大型馬。汗が赤っぽいことからこの名がある。極めて高価だった。

「蒼月ならやれるだろう」
「聞起の選んだ馬だからな」
こんな時に冗談をと振り返ると、黄玉はすでに、鞍を設え蒼月に跨っていた。その顔は真剣そのものだった。
「戦乙女……」
聞起は心の中で呟いた。
「戦袍を着ていてよかった」
黄玉がぽつりと呟く。
「聞起、阿骨打将軍を動かせてくれ。それまでわたしが。いや、わたし達が耐えてみせる。今夜は望月だ。これなら蒼月も走れる。頼んだぞ聞起。雪華姉様のことは任せておけ」
遠ざかって行く黄玉の後姿を、聞起は、ただ呆然と見つめていた。美しき戦乙女が天から降臨した。聞起にはそう思えてならなかった。

蒋唐が戸を叩き、名を告げると、中から棒をはずす音がした。
「曹瑛、分かったぞ。宮城の牢営だ」
入るなり蒋唐が叫んだ。
「そうですか。助け出すのは難しそうですね。でも、やらなきゃ。ここはわたし達しかいないのだし」
顔の脹れはひいてきているようだった。冷たい水で冷やしていたのだろう。
「曹瑛、仲間はどうしている」
「気づいていると思う。無用の小父さんは鋭い人だから。でも、時間がないわ。今夜中に何とかしなくちゃ、雪華姉さんの命が危ない。わたし一人でもやるわ」
蒋唐は、ともすれば焦りがちになる曹瑛を宥めた。
「私も手伝う。当然、鍵がかかっているはずだから、まず鍵を見つけることだ。鍵はおそらく、知府か魯櫂が持っている。私は魯櫂が怪しいと思う。知府は利用されただけだろう。これから二人で、魯櫂の屋敷に潜入してみよう」

「小父さん、わたし一人で行きます。これ以上、小父さんを危険な目に遭わせるわけにはいかないわ。魯櫂の屋敷はきっと厳重に警戒している。見つかったら命はないわ。小父さんにもしものことがあったら、わたし……」

「そんなこと気にしなくていい。私はもう十分生きた。おまえという素晴しい娘にも会えた。何よりも、死んだ蒋敬が私に言うんだ。お姉ちゃんを助けてと。曹瑛、私は命など惜しくないのだ。おまえとともに、生きた証(あかし)をたてたいのだ。私のことより、宋雪華と自分のことを考えるのだ」

曹瑛ははじめて涙を流した。この一年、蒋唐は陰になり日向になって自分を庇ってくれた。それがなぜなのかは分からないが、曹瑛は蒋唐を父親のように思っていた。これ以上蒋唐にあまえていいのだろうか、とも思う。だが、今この緊急の時に、蒋唐の助けが必要なことも事実だった。

「小父さん、牢営に行きましょう。行ってみて鍵を壊せなかったら、鍵を捜しましょう。とにかく、雪華姉さんの安否を確かめなきゃ」

蒋唐も頷き、木槌(きづち)や鉄鍬(てつぐわ)を奥から取り出し、二人で牢営に向かった。

一刻も経たずに牢営に着いた。途中までは人通りもあったが、宮城の辺りはさすがに人の気配はない。目立たせたくなかったのか、警備の兵士もいつもと変わらない。これならすり抜けられそうだ。二人は南門の扉のかげに身を隠した。ここから右に二百歩ほどで牢営に着く。二人、兵がいた。

「どうする、曹瑛」

「任せて」

曹瑛が、素早く短弓に矢を番(つが)えた。

それがひゅんと小さな音をたてると、一人の兵が糸の切れた人形のように崩れ落ちた。もう一人の兵が、驚いて仲間に近寄ろうとした。また、小さな弦音(つるおと)がした。兵は一瞬棒立ちになり、次いでかなり大きな音をたてて仰向けに倒れた。

蒋唐は息を呑んだ。曹瑛がひそかに弓の修練をしていたことは知っ

ていた。蔵の裏手に射場を設け、暇が出来るとそこで矢を射ていた。女一人だからと、曹瑛は笑って弁解していたが、これほどの上手だとは思わなかった。矢は短いが、矢柄は細い鉄製で、貫通力は申し分のないものだ。

「行きましょう、小父さん」

意外なほど敏捷な動作で曹瑛が駆け出した。蒋唐はついて行くのでやっとだった。倒れている兵を見た。息をしている。

「曹瑛、生きているぞ」

兵の左手の甲に、曹瑛の放った矢が突き立っている。

「鏃(やじり)に毒を塗っているの。首とか胸に当たらなければ死ぬことはないわ。少ししか塗ってないから」

それを聞いて蒋唐はほっとした。いくら敵とはいえ、あまり関わりのない者の死は見たくない。まして、それを曹瑛にさせたくはない。

「でも、魯櫂は殺します。雪華姉さんが無事であっても」

「私もそのつもりだ」

二人が目指す牢営に辿り着いた時、いきなり扉が開きだした。二人は突然のことに驚いたが、どこにも隠れるところはない。

「曹瑛、まずい」

蒋唐が小声で呻(うめ)いた。

男が出て来た。捕盗役人のいでたちをしている。がっしりとした体格の、四十過ぎほどの男だ。男は二人に気づき、少しの間曹瑛を見つめていた。月は煌々と輝き、夜空には雲一つない。曹瑛は凍りついたように立ち尽くしている。蒋唐は覚悟を決めた。木槌と鉄鍬を捨て、懐(ふところ)から短刀を取り出した。

「待て、おまえは曹瑛という娘か」

男が、意外なほど柔らかな口調で言った。

「そうです」

曹瑛の声に怯えはない。

「やはりそうか。そちらの男は」

「蒋唐だ」
「蒋唐……。おまえも宋雪華を救いに来たのか」
「そうだ。邪魔することは許さん」
蒋唐は短刀を抜いた。敵いそうにはない。相討ちを狙うしかない。
「小父さん、待って。この人、わたし達の敵じゃないわ」
「敵じゃなければ何なんだ。どうしてこんなところにいるんだ」
男がゆっくりと近づいて来た。蒋唐は庇うように曹瑛の前に出た。
「どうして雪華姉さんのことを知っているの」
「儂が来るように告げた」
「あなたが……」

「知府に命じられ、宋雪華に太原府に出向くよう伝えた。罠だと知っていながらな」
曹瑛は緊張した。この男がここにいる理由、それがどうしても思いつかない。
「不審なのは分かる。だが、儂はおまえ達の敵ではない。宋雪華を助けようとここに来た。ここに幽閉すると、知府に聞いていたのでな」
「雪華姉さんは無事なの」
「命はな。だが、ひどい火傷を負っているらしい。放っておけば、数日もたんほどのな」
曹瑛は、心の臓が止まりそうになった。
「雪華姉さん……」
「行っても無駄だ。鍵がない。扉は頑丈だ。そんな物は役に立たん」
男はそう言って、蒋唐の手放した木槌と鉄鍬を見た。
「どうしてそんなことが分かるのですか」
「牌頭※から聞き出した。簡単な手当てをしたそうだ。鍵のことは牢番から聞いた。聞いたと言うより吐かせたのだがな」
曹瑛はその時はじめて、男の服に黒い染みが幾つもあることに気づいた。
「殺してはおらん。奴らだって、命じられたことをしているにすぎん」

※牌頭　囚人の世話係

「どうしてそこまで……」
曹瑛は不思議に思った。雪華を罠に嵌めた側の人間が、どうして助けようとするのか。
「わけが分からんという顔だな。そうだ、儂も分からんのだ。ただな、これだけは言える。
もう一度、あの娘の目を見たくなったのだ」
「目を……ですか」
「そうだ。澄んだ、引き込まれるような目だ。もう一度、あの目を見たい。失いたくはないのだ」
曹瑛にはそれが理解出来た。雪華に対した者の反応は、おおよそ二つに別れた。雪華の目に引き込まれる者と、その目を避けようとする者とに。そして、引き込まれる者は、大概信用に足るということを経験上知っていた。自分が雪華に及ばないものの一つだった。いや、あの黄玉でさえ及ばないだろう。
「ありがとうございます。御助力、心より感謝いたします」
曹瑛は男に礼を言った。
「そんなことはいい。娘を助けたいのなら、儂とともに来い」
「どこへでしょうか」

「魯櫂の屋敷だ。鍵は奴が持っている。牢番がそう吐いた」
男はそう言うと、大股で歩き出した。二人を振り返りもしない。
「あの、お名前を」
慌てて曹瑛が尋ねた。
「袁偉。大谷県の歩兵都頭をしている。いや、していたと言った方がいいか。曹瑛、見事な弓の腕だな。狙い難い手を射るとは」
曹瑛は怪訝(けげん)そうな蒋唐を促して、闇の中に溶け込みそうな袁偉の後を追った。

太原府の西の城門に着いた。真夜中とはいえ、その日のうちに着いたのはさすが残月だった。石勇も少し待つうちに着いた。よく駆けた

が、石勇の馬はもう潰れそうだ。仕方がなかった。残月にさほど遅れずについて来ただけで立派なものだ。

「石勇、鈎縄を出せ」

「はい、ただいま」

石勇の態度は一変している。あの黒旋風とともにいる。石勇は信じられない思いだった。

黒旋風の名を知ったのは、村が賊に襲われる一年前のことだった。渭州で石工の監督をしていた李逵の父が、胥吏の不正に怒り、石工とともに談判したあげくに殺され、それがもとで母も自殺し、渭州を飛び出し、やがて仲間を集めて河東路の銅堤山に篭ったと聞いていた。その後、廂軍による掃討が試みられたがすべてはね返され、黒旋風と綽名された李逵の名は国中に広まった。あぶれ者や侠の中には、銅堤山に加わる者が相次ぎ、最盛期には四・五百人に達したという。百人斬りの伝説はこの頃のことらしい。悪どい役人や商人しか襲わず、奪った物を貧しい者達に配ったりしたので、世直しの義賊と言われて民の信望を集めていたが、三年前、突然姿を消したと聞いていた。それもそのはずで、その頃李逵は無用と名を変え、宋家村に居ついていたのだった。銅堤山の残党も各地に散らばり、その後の行方は知れなかった。なぜ李逵が突然宋家村に現れたのか、石勇にはどうしても分からなかった。そして、それを訊くのもためらわれた。尊敬し続けていた黒旋風だった。その人に、随分と大きな口をたたいたり逆らったりしてきた。それが恥ずかしくて、まともに李逵の前に立てなかった。

「どうした、石勇。さっさと鈎縄をかけろ」

「は、はい」

どうしてもぎこちなくなった。李逵は頓着していない。自らの素性を明かした時から、陽気な親父という顔を捨て去ったようだ。今はただ、恐ろしいほどの威厳を漂わす黒旋風だった。

石勇はおもいきり鈎縄を投げ上げた。城壁の上に落ちる小さな音が聞こえた。そのままゆっくりと手繰り寄せる。確かな手ごたえを感じた。守備兵がいないことは確認している。問題は、城外の民家だ。太

原府ほどの城郭になると、城外といえども民家が建ち並ぶ。宋家村に比べると密集と言ってもいい。李逵は後方を見つめている。

「大丈夫だ」

李逵がぼそりと言った。民家に気づかれなかったということらしい。

「行きます」

石勇は縄を手繰り、城壁に足の裏を貼り付かせて登った。背に縛り付けた鉄棒が重く感じられたが、何とか登りきった。下を見ると、李逵が難なく登って来るところだった。李逵が登り終わった時、左手の方から足音が聞こえて来た。数人のものだ。

「勘づかれたか」

「どうします、兄貴」

他の呼び方は思いつかなかった。いまさら無用の親父などとは畏れ多くて呼べはしない。

四人だった。槍を構えながら、じりじりと迫って来る。石勇が見ても隙のない構えに思えた。

「何をしている」

先頭の男が低い声で誰何した。

「石勇、一人だけにぶつかれ。気を抜くな。ただの廂軍じゃない」

言うや否や、李逵が漆黒の旋風になった。背に負った双斧を、後ろ手につかんだのだけは見えた。だが、その後の動きを追うことは出来なかった。しゅううという噴水のような音と、びしゃびしゃという夕立のような音が、間欠的に闇の中にこだました。三人倒れていた。

一人が槍を繰り出して来た。鋭い穂先だった。皮一枚でいなし、石勇は背の鉄棒を手に取った。何も考えず鉄棒を振り下ろした。ぶんという短い音が闇を震わせ、鉄棒は正確に兵の兜を襲った。ごっという鈍い音を残して、兵が崩れ落ちた。首は見えず、頭が肩にめり込んで、まるで冗談のような姿だった。

自分がやったのか。石勇は嘔吐しそうになったが、すぐに気を取り直した。雪華姉ちゃんを救い出すためだ。こんなこと何でもない。そう思うと、心が急に軽くなる。

「いくぞ、石勇」
李逵が石勇を叱咤した。その声には、幽(かす)かな優しさが込められているようだった。李逵なら、あっという間に四人とも倒していただろう。俺を鍛えてるんだ。石勇は、父に従う子のように李逵の後姿を追いかけた。横たわっている三人の兵を見た。首に一筋の赤い線が引かれているだけだ。何も分からぬうちに死んだのだろう。総毛が逆立つような双斧の技だ。黒旋風李逵。その名が、石勇の心を震わせている。
「いつもの守備兵ではない。廂軍の中でも戦闘部隊が出て来ておる。黄文炳の指しがねだろう。どこの隊営かは分からんが、厄介が一つ増えたようだな」
李逵はそう言って、太原府の街並みを見下ろした。

魯櫂の屋敷の正門に着いた。曹瑛は扉のかげに身を隠し、大丈夫という合図を送った。大きな影とやや細身の影が、寄り添うように曹瑛の後ろについた。
「塀の周りに見張りはいない。魯櫂め、油断しているな」
「そうでもありません。ここから見えるだけで五人が門を見張っています。内側を固めているのだと思います」
「普段から二十人以上の食客をかかえている。今なら三十人はいるだろう」
屋敷の灯は点っていた。もう三更※を過ぎたというのに、屋敷には慌しい気配が漂っていた。後寝(こうしん)の方からも人の気配がする。魯櫂はまだ休んでいないようだ。
※三更　午前0時頃
「儂が行ってみる」
袁偉が立ち上がりかけた。
「待ってください。都頭様より私の方が怪しまれない」
蔣唐は袁偉を信用したようだった。宋雪華の目を見たい。そう言っていたが、正直蔣唐には理解出来なかった。蔣唐は雪華に会っていない。何度も曹瑛に話を聞かされていたので、会ったつもりにはなって

いる。しかし目となると、これは実際に見てみないことにはどうしようもなかった。だが曹瑛は、当然のことのように信じている。蒋唐にはそれだけでよかった。

「私は何度もこの屋敷に来ています。番頭とは顔馴染みです。食客が出て来たら……」

蒋唐は曹瑛の顔を見た。

「わたしが」

「殺すのか、曹瑛」

曹瑛が黙って頷いた。美しい目だ。この目には宋雪華だって敵(かな)うまい。蒋唐は場違いな感慨をいだいた。

蒋唐はわざとよろけて門の中に入った。

「おい、魯櫂を出せ。番頭、蒋唐が来たと魯櫂に言え」

前庁に向かって大声で怒鳴る。酔った振りは得意だ。

間もなく、迷惑そうな顔で番頭が出て来た。手代の代わりに、屈強な男が二人ついている。

「蒋唐さん、どうしたのですか。こんな遅くに。皆が起きてしまいますよ」

番頭は、扉の留め金を開けて外に出て来た。

「昼間会えなかったから、こうして夜中に来たんじゃないか」

蒋唐は、いかにも呂律(ろれつ)が回らないといった様子だ。

「おやおや、こんなに酔っ払って」

そう言って、番頭は二人の男に目配せした。二人の男はいやいや蒋唐の両腕をつかんだ。蒋唐が首を大きく縦に振る。

続けざまに三つ弓弦(ゆづる)の音がして、蒋唐を囲んだ男達が倒れた。番頭を含め三人の首に、狙い違わず矢が貫通している。宮城で見せたのとは比べものにならないほどの素早さと弓勢だった。本当の腕はこれほどのものなのか。蒋唐は心の中で驚嘆した。

「行くぞ、時が惜しい。強行突破だ」

袁偉が剣の鞘を捨てて駆け出した。

一呼吸遅れて、曹瑛も続いた。まだ走るのはつらそうだった。蒋唐はあらためて、李吉を殺してよかったと思った。

袁偉を先頭に、三人は屋敷の中に突入した。前庁に男が三人いた。何事が起きたか分からぬまま、二人が首に矢を受け、残る一人は袁偉の剣で胸を貫かれた。剣格※まで突き刺さったため、袁偉は血飛沫を浴びながら足で男の身体を蹴り放した。飲みすぎたか。袁偉は少し後悔した。

※剣格　剣の鍔

前庁の左奥から足音が響いて来た。物音に気づいたらしい。袁偉はためらわずそちらに向かった。食客が守っている方に魯櫂がいる。袁偉はそう思った。

「曹瑛、私らも」

蒋唐のかすれ声が聞こえて来た。血の惨劇に興奮しているようだった。

袁偉が穿廊に出た。

「何だ、てめえ」

食客の一人が唸った。五人が穿廊の真ん中を遮っていた。異変に気づき、目が血走っている。

「死にたくなければ、退け」

袁偉の声は静かだった。

一人が棒を回して打ちかかって来た。袁偉は足を引いて棒をかわし、身体を一回転させた。棒が男の足もとに落ちた。腹には剣が突き立っている。袁偉はその剣を抜き、穿廊を進んだ。残りの男達は、気を呑まれたように一歩後退したが、すぐに四人同時に打ちかかって来た。袁偉は身体を回転させてそれをかわし、位置が入れ替わった一人の脇腹を背後から突き刺した。抜いた勢いで横の男の胸を貫く。抜く時に、剣が肋に引っかかった。剣を寝かせて抜いたが、その間に、残った二人が前庁の方に逃げ出した。

「肋が邪魔だ。胸は駄目だな」

袁偉はそう呟いて剣を見つめた。剣尖にわずかな欠けが生じている。

二人の食客は恐怖に駆られていた。そこそこ腕に自信があり、それ

を買われて魯櫂の食客におさまった。何もなければうまい仕事だった。金は悪くないし、時々武芸の鍛錬をするだけでよかった。民をいじめるのも快感だった。だが、こんなことになるとは夢にも思わなかった。

「話が違うぜ」

駆けながら、二人はそう罵った。

曹瑛が穿廊に入ると、二人の男が駆けて来るのが見えた。急いで矢を番(つが)えた。弦の音がして一人が仰向けに倒れた。男の駆ける速さが加わったのか、鏃は後ろ首に突き抜けている。もう一人が近づいて来る。間に合わない。そう思った途端、曹瑛の身体は後方にはじき飛ばされていた。背中を強打し、一瞬息が止まった。男の身体が曹瑛の腹の上に乗り、太い指が首にかかった。曹瑛は苦しくて手足をばたつかせたが、男の身体は岩のように重い。

意識が薄れる寸前、何かの衝撃が男を襲った。男の身体が横に倒れ、曹瑛の胸に空気が流れ込んだ。男の身体の上に、蒋唐が覆(おお)いかぶさっている。曹瑛が起き上がると、蒋唐もゆっくりと男の身体から離れた。

「曹瑛、大丈夫か」

蒋唐の言葉は優しかった。手に持つ小刀からは、真っ赤な血が滴り落ちている。その姿を見て、曹瑛は思わず涙を流した。

「小父さん……」

「曹瑛、鍵を。おまえの大切な人のために」

「はい」

曹瑛の返事には力が漲(みなぎ)っていた。

袁偉はさらに二人の食客を倒した。さすがに食客達も、不用意に飛び込んでは来なくなった。袁偉を遠巻きにして前進を阻んでいる。面倒とばかりに、袁偉は朴刀を構えた男に突進した。朴刀の巻き起こす風が袁偉の右頬を叩く。袁偉は身体を回して剣を突き出す。剣は男の首に滑り込み、硬い物に当たって止まった。首骨か。儂もなまったものだ。袁偉は自嘲した。

曹瑛と蒋唐が袁偉の後ろについた。

「時が惜しい。曹瑛、二人頼む」

「分かりました」
曹瑛が矢を番(つが)えるのと、袁偉が床を蹴るのは同時だった。曹瑛が一人射るのと、袁偉が腹を貫くのには、わずかな差しかなかった。間髪を入れず、袁偉はもう一人の左腿を貫いた。少し遅れて、曹瑛の放った矢が残りの男の喉笛を貫いた。袁偉の全身が返り血で朱に染まっている。
「どうした、何があった」
魯櫂の大声が後寝から聞こえてきた。
「魯櫂がいる」
蒋唐の声だった。
後寝から男が出て来た。男は、袁偉に腿を刺されてのたうち回っている食客の髪をつかむと、穿廊の横にある庭石に思いきり頭を叩きつけた。食客は、一度大きく身体を跳ね上げると、そのままぴくりとも動かなくなった。
「おやおや、都頭さんじゃありませんか。何をとち狂ってこんな酔狂なまねを」
「丁洪、牢営の鍵を渡せ」
丁洪は嬉しそうに片頬に笑みを浮かべた。
「都頭さん、そんなこと出来るわけないじゃありませんか。だいいち、俺は鍵なんざ持ってませんぜ。鍵は……」
丁洪は顎で奥を指した。

「鍵は魯櫂が持っているのだな」
「勝手にどうぞ。ただし、ここを通れればの話ですがね」
曹瑛の矢が放たれた。矢は丁洪にかわされ、虚しく後ろの柱に突き立った。
「娘、威勢がいいな。ぼんくらどもには使えても、この俺には通用しないぜ。そうだ、おまえもあの娘のように身体を焼いてやろうか。いい見物(みもの)だった。皮の焦げる臭いなんかな、たまんなかったぜ。ようし待ってな、おまえも同じ目に遭わせてやるからな」

丁洪の両目が怪しく光った。
曹瑛は一歩足を踏み出した。穿廊は血の海と化し、足が粘ついて気持ちが悪い。
「曹瑛、おまえは奥に向かえ。魯櫂から鍵を奪うのだ。この外道(げどう)には儂が当たる」
袁偉が丁洪の前に立った。
「どうしたんだい、都頭さん。あの娘を嵌めに行ったのはあんたじゃないか。何をとち狂って、この娘の味方なんかしてるんだい」
丁洪も剣を構えた。
「外道に話すいわれはない。儂はな、おまえに出会った時から気にくわなかった。魯櫂もそうだ。おまえ達がしていることをな、儂はずっと前から許せんと思っていたのだ」
「あんたに許してもらわなくたっていいさ。あんた達役人だって変わりゃしねえよ。お上の仕事をしてます、正しいことをしてますって顔をしてやがる分、たちが悪いってもんだぜ。それにな、都頭さんよ。あんたじゃ俺を止められないぜ」
「曹瑛、行くんだ」
曹瑛は後寝に向かって駆け出した。蒋唐も続いた。
「もうすぐ、別棟に待機している連中が来るぜ。十人以上だ。どうだい、都頭さん一人で大丈夫かい。簡単に死なれちゃつまらねえ。せいぜい楽しませてもらおうじゃないか」
丁洪は剣背を舌で舐めると、不気味な笑いを浮かべた。かなりの使い手だ。袁偉は思った。だが、殺らねば。袁偉は剣身に気を注いだ。
幕舎(ばくしゃ)※が見えた。黄玉を見送ってからおよそ八刻、まだ夜は明けそうになかったが、朧月に疲れは見えない。※幕舎　テント張りの移動宿舎
「阿骨打将軍に急用。通してくれ」
見張りの兵は聞起を見知っている。すぐさま道を開けて聞起を通した。
「そこで待て。今、伝令を出す」

軍人でもない者を、こんなに簡単に通すことなど普通はない。聞起は特別だった。実の息子のように阿骨打に可愛がられていたし、女真の若い兵士達は聞起を尊敬していた。騎馬民族にとって、馬の扱いに長けている者は、それだけで賞賛に値するものだった。

「急いでくれ。重大なことなんだ」

「分かった。阿骨打将軍は寝起きの悪い方ではない。すぐに起きられるだろう」

もう一人の兵が幕舎に向けて駆けて行った。聞起はじりじりする思いでそれを待った。本当は、無用とともに太原府に行きたかった。雪華姉ちゃんを助けたかった。だが、助け出した後が問題だ。廂軍、へたをすると禁軍を相手にするかもしれない。退路を確保する。無用が聞起に期待したのはそのことだったはずだ。そして、それが出来るのは自分だけだ。速く駆けることでは、自分と朧月の右に出る者はいない。聞起はそう自負していた。

「将軍が会われるとのことです」

戻った兵が告げた。見張りの兵は、よかったなと言うように聞起に微笑みかけた。

「ありがとう」

そう言って、聞起は阿骨打の幕舎に向かった。

阿骨打は何か考えているようだった。

「将軍、雪華姉ちゃんが……」

そこで、阿骨打は聞起を遮った。

「宋雪華が捕らえられたのか」

阿骨打が沈痛な面持ちで言った。

「そうです。太原府の知府と、魯櫂という大商に」

聞起は下を向いた。雪華のことを思って、涙が零れたのだった。

「いつだ」

阿骨打の声は穏やかだったが、その目には燃えるような怒りが浮かんでいた。

「今日、いえ、昨日の昼」

「太原府だな。間に合いそうだ。助けには誰が行った」
「無用の小父さんと石勇が。少し前に黄玉も」
「そうか、黒旋風が行ったか。なら、何とかなるかもしれん」
「黒旋風……」
聞起は何のことか分からなかった。
「知らなかったのか。無用はな、本当の名を李逵というのだ。おまえも聞いておろう。銅堤山の黒旋風、それが奴だ。どうしておまえ達の村に入ったのかは分からんがな。宋雪華は気づいておったようだぞ」
「無用の小父さんがあの黒旋風……」
聞起は信じられないという顔で絶句した。
「聞起、急ぐぞ。大事になれば、太原府城外に駐屯しておる禁軍が出て来る。儂らがそれを止める。宋雪華を死なせてはならん。絶対にだ。おそらく、儂のことが漏れたに違いない。儂の責任だ。おまえ達は、儂らが着くまで何としても持ちこたえるのだ」
阿骨打の言葉は、自分自身に言い聞かせているようだった。
「俺はすぐに行きます」
聞起の頬に、涙の跡があった。
「馬は大丈夫か」
「水と秣(まぐさ)を。それで朧月は駆けられます」
「そうだな、聞起と朧月ならばな」
「将軍のところに来てよかった。これで、雪華姉ちゃんを助けに行ける」
「心置きなく行け。儂もすぐに後を追う」
聞起は深々と礼をして幕舎を出て行った。やがて、馬の蹄(ひづめ)の音が聞こえて来た。
「急げ、聞起」
阿骨打の心の中を、後悔と焦燥が渦巻いていた。
陳統が宋家村に着いたのは、陽が落ちてから四刻ほど過ぎた頃だった。伝えに来た宋伸は馬とともに置いてきた。人も馬も疲れ果ててい

たからだ。弦月は、久しぶりの疾駆に喜んだようだ。聞起が連れて来た五頭の汗血馬のうちの一頭だった。聞起はよく五頭も連れて来られたと思う。一頭でさえ大変なことなのだ。五頭は、父親が同じ兄弟姉妹なのだという。雪華の残月、聞起の朧月、黄玉の蒼月がこの順で兄弟。そして自分の弦月、曹瑛の水月が、やはりこの順で姉妹だった。

聞起はほとんど譲り受けたような値で五頭の馬を連れて来た。はじめは残月一頭だったが、次々と残りの四頭を連れて来た。汗血馬といえば西夏、それも涼州が有名だが、その西夏でさえそうそうお目にかかれないほど貴重な馬だった。何でも、聞起が遼で馬を探している時に、西夏で牧を営んでいる男と知り合いになり、すっかり意気投合したとのことだった。その男は、商い用の馬とは別に、汗血馬の繁殖に力を注ぎ、五頭はその成果とのことだ。馬の見立てや病に精通し、馬に対する愛情も聞起を凌ぐほどだったという。三月ほど滞在し、馬に関する様々なことを教わり、聞起は牧を辞したという。別れ際、聞起が宋家村のことを話し、雪華が村の立て直ししのために遼、西夏との交易をはじめようとしていることを打ち明けると、男は聞起に、自分で育てた一頭の汗血馬を譲ってくれたのだそうだ。男は宋の人で、同じように賊に家族を殺されたのだと言った。その悲しみを忘れようと、西夏に赴き馬の商いをはじめたのだという。

聞起の仲立ちで、陳統も男と親しくしていた。男は弦月に会うととても嬉しそうだった。そして宋家村のこと、聞起達のこと、何よりも他の四頭のことを訊いてくるのだ。聞起とは今でも時々会っているようだ。馬のことを訊きに来るらしかった。陳統も三十過ぎらしいその男が好きだった。頼れる兄のように思っていた。背が高く、紫がかった美しい髯を蓄えていた。物腰も柔かく、士大夫※のような印象から、紫髯伯※と綽名されていた。

皇甫端、それが男の名だった。

※士大夫　教養人。宋ではこの階層が廷臣として力を有した

※紫髯伯　紫の髯を蓄えた紳士

館には灯が点っていた。門をくぐり、陳統は弦月から降りた。
「着いた。誰か出て来てくれ」
陳統は大声で館の者を呼んだ。
伍小母さんが大慌てで出て来た。
「陳統、着きましたか」
「おおよそのことは宋伸から聞いたよ。無用の小父さんは行ったのかい」
「ええ、石勇を連れて。もう太原府に着く頃だと思うのだけど」
「俺は何をすればいい。俺も雪華姉ちゃんを助けに行きたいんだけど」
「李逵様、いえ無用様は助けた後のことを陳統に期待しているのだと思います。陳統が自分で考えるようにと言い残しました」
陳統は黙り込んだ。
「陳統、助けに行きたい気持ちは皆同じです。でも、それは無用様に任せましょう。おまえとは違い、私が行っても足手まといになるだけです。それで私は、私に出来ることを考えました」
「出来ること」
「このようなことになった以上、ここに戻るのは危険です。うまくお嬢様を助け出せたら、どこか適当な場所に隠れなければなりません。私は、お嬢様がいつ戻ってもいいように、ここを守り抜くつもりです」
「そうか、もう戻れないんだ」
「無用様もそのおつもりでした」
「分かった。それは俺が引き受けた」
「荷は太平車にまとめてあります。馬で牽けるようにしています。村人をつけますか」
「いや、村の者を巻き込むわけにはいかない。俺一人でいい。これは俺の仕事だ」
「おまえに任せれば私も安心です」
「助け出せたとしても、動けるのは明日の陽が昇ってからだ。夜の間に太原府の城外まで運ばなくちゃ」

陳統の目が輝きだした。

曹瑛は後寝に入った。少し遅れて蒋唐も続く。三人の男と魯櫂がいた。

「きさま、蒋唐。なぜおまえが……」

魯櫂が呻いた。

男が棒を振り上げる前に、曹瑛が矢を射た。男の喉から血が噴き上がる。矢は後ろの壁に突き立っていた。首骨に当たらず、血の管だけ切り裂いて貫通したようだ。男は口から、ひゅうひゅうと嫌な音をたてて倒れ込んだ。

蒋唐が剣を持った男に身体をぶつけた。二人は倒れながら揉み合っていた。男の首から血が噴き出し、蒋唐が肩で息をしながら立ち上がった。朴刀(ぼくとう)を持った男が曹瑛の肩を狙った。右に転がりそれをかわした。立ち上がる時、二撃目が来た。左脇だった。後ろに倒れ、すんでのところでかわした。曹瑛の体勢が大きく崩れた。次はかわせない。曹瑛は覚悟した。男は曹瑛を見て、にやりと笑った。朴刀が男の右脇に構えられた。次は首、そう思ったが避けられそうになかった。

蒋唐が男の背にぶつかった。小刀が、男の左脇腹に柄(つか)まで突き刺さっていた。男が呻くような声を上げて崩れ落ちた。曹瑛は、立ち上がると同時に矢を番(つが)えた。

魯櫂が逃げ出そうとするのが見えた。曹瑛は魯櫂の足を狙った。矢は魯櫂の左腿を貫通した。曹瑛が二の矢を番えた。放たれた矢は、魯櫂の右腿に突き立った。魯櫂がその場に倒れ込む。ほぼ同時に、蒋唐が膝をついた。

「小父さん」

曹瑛が駆け寄り、蒋唐の肩を支えた。蒋唐の脇腹から血が流れている。右だ。

「小父さん、しっかり。今、手当てするから。気をしっかり持って」

曹瑛の声は叫びに近かった。蒋唐の顔から血が退(ひ)いていくのがはっ

きり分かった。曹瑛は蒋唐の右手を握り締めた。だが、握り返す力は弱い。

「曹瑛、無駄だ。肝の臓をやられている。おまえは私に構わず、魯櫂から鍵を奪うのだ」

蒋唐の声に力はない。

「小父さん、駄目。わたしを置いて死んじゃ駄目。小父さんはわたしの父親だと思ってたの。だから、死んじゃ駄目」

曹瑛の頬を、涙が幾筋も流れ落ちた。

「曹瑛、おまえに会えてよかった。おまえの役に立ててよかった。おまえは本当にいい娘だ。私は、おまえに綽名をつけていたんだよ。神算子というんだ。本当は、死んだ蒋敬につけた綽名だ。男のような綽名だが、頭のよいおまえにはぴったりだ」

蒋唐の手が、少しずつ温もりを失っていた。

「お父さん、死なないで。蒋敬よ。わたしは蒋敬。だから、だから死なないで」

曹瑛の胸は張り裂けそうだった。蒋敬になる。そうなりたい。だから死なせないで。曹瑛は必死で祈った。

「そうか……蒋敬か。私はあの時逃げてしまった。そうか……蒋敬、許してくれるか。不甲斐ない父を……許してくれるのか」

「素晴しいお父さんだったわ。蒋敬は幸せでした。また一緒に……また一緒に遊ぼうね」

「蒋敬……蒋敬が笑っている」

「お父さん……」

曹瑛は号泣した。

「風が……身体の中の風が……止んだ」

蒋唐の目から光が消えた。曹瑛は蒋唐の手を握り締めながら、肩を震わせて泣き続けた。

袁偉は丁洪を前に動けずにいた。穿廊は血の臭いでむせかえるようだった。丁洪も、剣を構えたまま動かない。

「どうした、都頭さん。早く俺を突いてくれよ」
かなりの腕だ。簡単には踏み込めない。後寝から曹瑛の泣き声が聞こえて来た。
「あの親父、死んだみてえだな。素人が首を突っ込むからいけねえんだ。俺や都頭さんとは違うのによ」
「あの娘だって素人だ」
「あの娘が素人……。違うな、玄人(くろうと)になりつつあるさ。見た目は可愛いがな、そのうち平気で人を殺すぜ。今はまだ弓の腕だけだから俺もかわせるが、人を射ることに慣れちまえば俺だってかわせなくなる。まだ人を射ることに躊躇いがある。どれほど正確に射ても、その躊躇いが隙を生むってわけさ」
「あの娘は躊躇わんと思うがな」
丁洪は、一瞬嫌そうな顔をした。
「そんなことより、俺達もけじめをつけようじゃないか。もたもたしてると邪魔が入るぜ」
丁洪は右手の剣を大きく後ろに引き、左足を膝の高さまで上げた。あまり見たことのない構えだった。
袁偉は左手に剣を持ち、右足を前に出した。剣尖は下に向けている。
ふいに丁洪の左足が床に着いた。凄まじい剣風が袁偉を襲った。丁洪の肩が流れ、思わぬところまで剣尖が伸びて来た。袁偉は身体を引き、肩を残した。丁洪の剣が袁偉の左肩を刺した。
「ほほう、なかなかやるじゃねえか。わざと肩を残して身体を引くとはな。だが、次はどうかな」
丁洪は抜いた剣を背に隠すと、身体を沈め袁偉の左足を払った。袁偉の左脛(ひだりすね)から血が噴き出した。丁洪はそこから跳躍し、逆手(さかて)に剣を持ち替えた。反射的に袁偉は一歩踏み込んだ。考えたのではない。身体がそう動いた。丁洪が舌打ちして床に降り立った。丁洪の左足からも血が流れている。袁偉は両手で剣を支えた。
前庁の方から人の声が聞こえて来た。何人もの男の声だ。
「ようやく来やがったか。都頭さんよ、遊びはおしまいだ。けりをつ

けるぜ」
丁洪が、踏み込むと同時に剣を繰り出して来た。袁偉は剣筋を捉えることが出来なかった。息つく暇もなく丁洪が剣を繰り出す。袁偉は剣で払い、身体をかわしてしのいだ。二箇所刺された。右腕と胸。胸の傷は深く、息をするたびに空気が漏れるような音がした。心の臓には達していない。だが、肺の腑がやられている。力が抜けていくのが分かった。
前庁から大きなどよめきが伝わって来た。すぐに、悲鳴と怒号が聞こえて来た。
「遅い。何をやってやがる」
丁洪が剣を突き出しながら怒鳴った。
剣が腹に刺さるのを感じた時、袁偉は前庁から黒い大きな塊が飛び出すのを見た。塊は飛ぶように近づいて来た。
「て、てめえは……」
丁洪の首が、まるで蹴鞠のように跳ね上がった。頭のあったところから、噴水のように血が噴き上げた。ふたつほど瞬きする間に、剣を握ったまま丁洪の身体が崩れ落ちた。袁偉も膝をついた。丁洪が死んだ。袁偉は心地よい満足の中にいた。目の前が白く滲む。もう一度あの目を見たかった。薄れ行く意識の中で、袁偉は雪華の微笑みを見たように思った。

「曹瑛、生きておるか」
血で黒く染まった穿廊を駆けながら、李逵は血眼で曹瑛を捜した。
「小父さん、こっち。魯櫂もいるわ」
後寝の方から曹瑛の声がした。
「間に合ったか。曹瑛、今行く」
どうして無用がここに来たのかは分からなかったが、曹瑛はようやく現実に戻ることが出来た。蒋唐の身体をそっと横たえ、曹瑛は李逵を迎えた。
「魯櫂、いいざまだな」

李逵は、両足から夥(おびただ)しい血を流して動けないでいる魯櫂を睨みつけた。
「おまえは……無用か。やはり、おまえが来たか」
「俺は李逵。黒旋風だ。おまえを殺すために、儂は無用を捨てた」
曹瑛が息を呑むのが分かった。魯櫂は苦しげな顔をしたが、すぐに諦めたように目を閉じた。
「そうか、あの黒旋風だったとはな。大失敗だったわい。手を出すべきではなかったということか」
曹瑛が魯櫂の袖(そで)を探った。鍵があった。
「では、地獄に送ってやる」
李逵の板斧が動いた。
魯櫂の首が部屋の隅に転がった。
「曹瑛、よく無事だったな」
李逵の声が曹瑛の胸に響いた。
「この方達がいてくれたから……」
曹瑛は蒋唐の亡骸(なきがら)を見つめた。また、涙が溢れてきた。
「もう一人、向こうにいたが……」
「袁都頭様は」
曹瑛が李逵に訊いた。李逵は何も言わず首を横に振った。
「わたしのために二人の方が……」
曹瑛は下を向いたまま、じっと立ち尽くしていた。
「曹瑛、戦とはこんなものだ。これは遊びではない。犠牲は当然出る。これからもな」
「はい……」
石勇が、全身に返り血を浴びて駆け込んで来た。
「兄貴、片づけ終わった」
「よし、曹瑛も無事だった。嬢さんを助け出すぞ」
「瑛姉ちゃん、無事でよかった。城壁を越えた後、瑛姉ちゃんのところに行こうとしてここを通りかかったんだ。兄貴が魯櫂の屋敷だって言って中に入ると、この惨状だ。まさか瑛姉ちゃんがこんなことをし

てるなんて。でも、とにかく間に合ってよかったよ」
「石勇、わたしもう迷わないわ。今まで、戦うということにどこか迷いがあったの。逃げていたのよ。弓の練習をしていても、ただの嗜(たしな)み程度にしか思ってなかったの。でも、違うのね。こんな無法がまかり通る国では、戦うために強くならなくちゃね。弱いままだと踏みにじられるだけ。三年前のように……」
「ああ、瑛姉ちゃん。その通りさ。俺も強くなりたい。兄貴みたいに」
李逵は何も言わず曹瑛を見つめていた。
「さあ、行きましょう。雪華姉さんは宮城の牢営に閉じ込められているわ。鍵はここにあります。急ぎましょう」
李逵が曹瑛の肩をおさえた。
「曹瑛、儂も急ぎたいが、その前にやることがあるだろう」
曹瑛は蒋唐の亡骸を見た。
「いいんですか」
「儂と石勇ならばすぐ終わる。二人を弔(とむら)ってやろう」
流れ落ちる涙を拭おうともせず、曹瑛は蒋唐の亡骸を抱いた。
「瑛姉ちゃん、大した腕だな。いつの間に弓を」
石勇の声だけが部屋に響いた。